

禅の友

—Zen no Tomo—

9

September 2022





ご本山だより 大本山永平寺 【愛宕山諷経】

あたごやま ふぎん

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



永平寺の法堂から外の景色を眺めますと、正面に愛宕山と呼ばれる山を望むことができます。永平寺の伽藍に向かい合うように眼前にたたずむこの山は、四季折々で木々の美しい姿を私たちに見せてくれます。またその名

のとおり標高約三四〇メートルの山頂には愛宕大権現をお祀りする小さなお堂が建立されており、そこから伽藍が一望できます。

愛宕大権現は永平寺全山林の守護であり、また火伏・防火の神さまでもあります。毎月の鎮守諷経ではその報恩供養を行っておりますが、九月初めには、お袈裟を身につけた正装姿の修行僧が列をなして愛宕山へ登り、山頂にて『観音経』をお唱え致します。処暑に入り暑さの峠を越えた時期ですが、まだまだ厳しい残暑と歩きにくさの中、額に汗を浮かべながら一生懸命に山道を十五分程歩き、ようやく山頂

に着くと冷たい水を一杯いただいてから諷経を始めます。

「火」で思い出しますのは、先代の禅師さま、永平七十九世福山諦法故禅師さまよりご挨拶を賜った際の「くれぐれも火の用心を」とのお言葉です。木造である永平寺の伽藍は約八〇〇年の歴史の中で何度となく火難によって焼失しており、火の始末が大切であることは言うまでもありません。しかしながらある時、故禅師さまの度々の「火の用心」というお言葉には実際の火の始末のみならず、我々の「煩惱」という火の用心をもお諭しになっっているのだという教えをいただきました。

今月末にはご開山・道元禅師さまのご命日に合わせて一週間の「御征忌法会」を修行致します。日々の行持という人事を尽くし、愛宕山からの眺望の先に日常の心を振り返っております。



ご本山だより

大本山總持寺【九月の總持寺】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一

「長月」と異名がある九月は日中でも少しずつ風に涼しさを感じられる

ようになり、秋が徐々に深まってきます。秋が深まると日が暮れるのが早くなるため、夜が長い月という「夜長月」が略されて「長月」となったそうです。樹木に囲まれている總持寺でもその木々の間を通って涼風が感じられるようになりました。

本山では四月八日に挙行される予定でありました本山独住第二十五世・江川辰三禪師さまの本葬儀式禮が感染症拡大の為やむなく延期となりましたが、九月十三日・十四日の両日に挙行されることになりました。

江川禪師さまは十年間の長きに亘り本山貫首として宗門内外にご活躍され、昨年の九月十九日九十三歳にて遷化（特に僧侶の死を意味し、現世の

教化を終え、別の世に教化を移す）されました。

未だ収束をみない感染症ではあります。状況と合わせてしっかりとした対策をとらなければなりません。またこの式禮が終了すると秋のお彼岸会が始まります。ご先祖さまを供養すると共に仏さまという大きな鏡に自身を写し出して反省を加え、六つの善き行い（六波羅蜜）の種蒔きをし、世界が平和で幸せになる為の一週間の修養期間がお彼岸であります。その六つとは布施（施し）、持戒（規律を守る）、忍辱（寛容）、精進（努力）、禪定（心を静める）、智慧（正しい判断力）です。六波羅蜜を実践し、悩みの多い現実の世界（此岸）から煩惱から解放された世界（彼岸）へ達しようとして進みたいものです。

選・坊城俊樹

そそり立つ柱状節理夏つばめ

長野県 森山 昌子

評 柱状節理は重なった地層が湾曲して縞柄の崖ができることである。それはかなりの高さになる。そのそそり立った絶壁を夏の燕たちが乱舞している。そこには燕の巢もあるのだから。この雄大な景色を臨場感あふれる句に仕上げた力量はたいしたものだ。

法螺貝に波の音聞く鑑真忌

愛知県 紅林 廣子

評 鑑真の忌日に彼が生きていたころへとタイムスリップした。この波の音とは、鑑真が幾度となく渡航したときの東シナ海の怒濤の音かもしれない。それが今吹かれている法螺貝の音と重なってゆくのである。宗教というものの無限大の力をこの句に感じる。

◆ 五月雨に金剛杖の女侍つ 三重県 荊屋 奈良美

◆ 白き蝶大樹に集ふ緑雨かな 宮城県 高橋 静子

◆ 石佛のひび割れさうな旱空 東京都 松本 キヌエ

◆ 聞き役に廻り蚕豆剥いてをり 島根県 俵 保恵

◆ ひそひそと葉づれの音や臍月 鳥取県 徳本 義則

◆ ショパン弾くやうに屋根打つ春の雨 福島県 大槻 弘

◆ 梅雨に入り園庭遊具色冴ゆる 神奈川県 池亀 恵子

◆ 螢火は思ひ出の中闇の中 秋田県 田村 恵美子

◆ モデイリアーニ裸婦の目ぢから風薫る 大阪府 口本 美智子

◆ 鶉飼了へ残るは月と水の闇 東京都 鈴木 英治

選者吟

イングリッドバーグマンてふ薔薇激し 俊樹

作句小見

イングリッドバーグマンという女優の気性が激しかったのかは知らない。ただ薔薇園でその彼女の名が付いた真紅の薔薇はひとときわ赤くそして豪華に見えた。その香りもまた絢爛なような気がした。全て私の主観なのだがこんな句があっても良いのでは。

選・長澤 ちづ

稚児^や逝^やきて弔う人の振る舞いの茶を受けるとき乳匂^ちいたり

秋田県 後藤 榮子

評 乳呑児が何らかの事情で亡くなり、その弔いの席でお茶を振舞う若い母親、その胸元からはまだ乳の香りがしたと詠う。悲しむ様子を詠うのではなく一瞬の乳の香りをとらえて哀切である。

叶わざる妹の生想いつつ寝台の下の靴仕舞^まいたり

三重県 西村 廣視

評 ベッドの下の靴は、元気になって立ち上がり履くための靴。病が進み、それが叶わなくなつた今、靴を仕舞う作者の心情は如何許りか。生そのものを象徴する靴の存在である。

◆ 満月の見守る尾道水道を西に東に小船が走る

広島県 小畑 宣之

◆ 雨上がりのおちぎうさまの類なでておつむをめぎすやミスジマイマイ

三重県 藤川 幸子

◆ 銀の町大森は午^{ひる}托鉢の僧にをりふし花埃せる

島根県 横山 豪吾

◆ ポンと石たたけば池の大き鯉体くねらせ吾へと未たり

長野県 山崎 さと子

◆ 吹く風に山を盛り上げ椎若葉植えし田の面に景を落として

鳥取県 真山 博充

◆ 遺されしひとりりの家に独り食む三食の食器疎かならず

東京都 長谷川 瞳

◆ 友は皆雑談したくてコロナ禍の電話は受けてもかけても長し

北海道 加藤 智子

◆ 揚げ雲雀下りくる雲雀鳴く声の止み間なくして雨はれし朝

鳥取県 徳本 義則

◆ 歩行者の足緩めたり氷店前奥で働く人の背は汗

茨城県 馬場 信一

◆ そのひとの性そのままに脱がれたる靴の爪先丸くまあるく

兵庫県 前田 あつ子

選者詠

五串^{して}に垂^{して}よ下げつつ思うのは母逝^{して}きてよりの

時の加^{して}速^{して}よ

ちづ

作歌小見

横山さんの「銀の町」は嘗て石見銀山で栄えた町で大森銀山とも呼ばれて今は世界遺産となっています。過酷な労働で死者も多くその霊を慰める「僧や花埃」かとも思われます。長谷川さんの歌からは丁寧な暮らしの佇まいが伺えます。